学問と方法

小嶋孝三郎

三年続きの盗作で歌会始はマンシンソウイのようである。盗作者はテレビでイケシャアシャアと盗作でないと言い切っていた。そんなのを聞いていたら、およそあの人達は、芸術と無関係の存在でしかないと思った。

考えてみれば、和歌は永い間宮廷の温室の中で育って来た。「古今集」以来、宮廷サロン文学として、否応なしに栄えて来た。歌のたしなみが社会的地位をも保障したからであろう。好むと好まざるとに拘らず、彼等貴族はこれを教養として、無用・有用の用として選ばされた。恋に、死に、別れに、賀に——。がしかし、名誉やコケンにかかわるという非芸術的環境の中では、盗作が盗作でないような、もったいぶった説明がしばしば行なわれ、天皇の権威と結合して悪の華を咲かせたりした。少数の偉大な歌人の系譜を除けば、諸々は模倣や盗作を事としたトンチ教室に外ならなかった。トンチが芸術だと錯覚する輩の出るのも無理はない。枕冊子では、清少納言が中宮彰子の召しに応じて、とっさの機転をきかせた歌を作って褒められたりしているが、それが芸術と無関係であったことは今更云うまでもないであろう。

芸術は美を客観化するための独自の創造としてその意義を有するのみならず、個の生における必然といかに結びついているかがより重要ではなかったか。孔子は「述而不作」といったが、その真意は深遠であり、宗教的境地でさえある。学問が対象（現象）を記述し、その原理（本質）を究めるのに、一定のものさしだけに則っていると、それに合わない対象を疎外しがちになるのではなかろうか。

学界の現状はどうか。数多くのすぐれた学者の業績を見ると、その学説や体系の偉大さに頭が下るが、新資料の発見の場合は別として、新学説の提唱とか云われるものの中に、外国製の理論や方法を焼き直して、堂々とのさばっているのは盗作とは別だろうか。また、他人の説を言葉だけ変えて、さも自分の新見のように論じているものはないだろうか。

研究の方法にしても、いつもオーソドックスな既成の方法だけに則って、それ以外に科学的方法は考えられないと思い込んでいる人はいないだろうか。先輩の考え出した方法をそのまま用いたりしているのは、広い意味では盗作かも知れない。

学問における方法はスポーツにおけるルールのようなもので、ルールを守らぬところには正しい競技は行なわれない——という考え方があろう。がしかし、この考え方を絶対視するのは全くナンセンスである。学問における方法は決してそのような絶対的なものではなく、単なる便宜的なものである。真理を解明するための手段にすぎない。手段はあくまで手段であって、廿世紀の手段が廿一世紀にも通用すると思ったら大間違いである。物の見方や考え方は、常に対象そのものに即して考えられねばならぬものであって、はじめから定まった方法を用いて対象を見ようとするのは、丁度対象が何たるかを見ないさきから、顕微鏡や望遠鏡を構えるようなものではなかろうか。真理を計るものさしにむやみと長短があったりしては困りものだが、一つのものさし以外に真理を計るものはないなどと考えるのはとんでもないことだろう。

先人の方法をただ踏襲するだけでは学問の進歩はない。

（三八・一・一五）